

法 科 回 顧 錄

THE LAW DEPARTMENT :
A RETROSPECT

I. 回 顧 座 談 會
ROUND-TABLE TALKS ON THE PAST

II. 回 想 談
REMINISCENCES OF PROMINENT
WASEDA MEN

III. 法科の過去及び現在
THE LAW DEPARTMENT,
PAST AND PRESENT

早稻田大學創立五十周年記念法科回顧座談會

昭和七年九月二十五日 於 大 隈 會 館

外 岡 茂 十 郎 氏

寺 尾 元 彦 氏

遊 佐 慶 夫 氏

大 橋 誠 一 氏

中 村 萬 吉 氏

上 原 鹿 造 氏

前 田 多 藏 氏

牧 野 菊 之 助 氏

中 村 芳 雄 氏

關 直 彦 氏

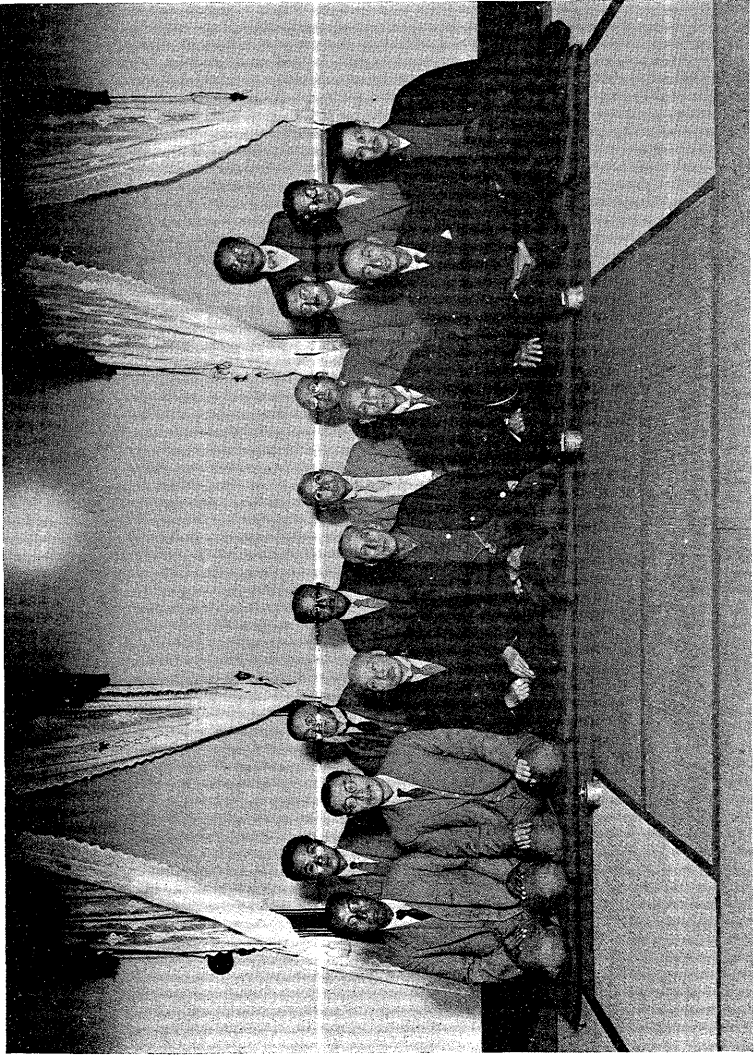
中 村 宗 雄 氏

德 山 久 吉 氏

渡 邊 亨 氏

大 濱 信 泉 氏

中 村 進 午 氏



法 科 回 顧 録

本年は、學園創立五十周年に當る。五十年と云へば、半世紀であり、其間、迂餘あり曲折あり、將來のため記録し置くべき事柄も數多あるので、大學としても、之れを取纏め「半世紀の早稻田」と題して公刊し、それを關係者に贈呈、頒布したのである。併しながら我法科としても、此際、過去五十年の間、我法科を繞る事績を取纏め、記録し置く必要が多分にあるので、本會管理委員會は、本記念號の末尾に「法科回顧録」を附することに決定した。而して其編輯方法としては、先づ我法科關係の先輩諸名士の出席を乞ふて座談會を開き、我法科を中心としたる回顧談を願ふと同時に、此座談會に御出席なかりし諸氏からは、回想談の寄稿若くは談話を願ひ、之れを取纏め掲載する方法を執つた。以下、その座談會の速記竝に先輩諸氏の回想談(寄稿及び談話筆記)を掲載する。

I. 回 顧 座 談 會

一 日時場所 昭和七年九月二十五日 於大隈會館

二 出席者 (五十音順)

上原鹿造、大橋誠一、關直彦、中村進午、中村萬吉、中村芳雄、
前田多藏、牧野菊之助、渡邊亨、遊佐慶夫、寺尾元彦、中村宗雄、
外岡茂十郎、大濱信泉

○寺尾元彦氏 一寸私から御挨拶を申し上げます。早稻田大學の創立五十周年の記念日が丁度十月二十日に當りますので、學校としても色々の催しがあるやうであります、法學部としましては今迄十年ばかり「早稻田法學」といふ機關雜誌を出して居ります、其方の催しと致しまして、記念

論文集を發行致すことになつてをりますが、同時に法科の過去を追懷して昔の早稻田といふものを後の人に傳へることが段々人も變りますから意義のあることではないかと云ふ相談が同人の間に持上りまして、この學校出の先輩の方、長い間學校で教鞭を取つて下さつた方、職員として學校の事務に携つて下さつた方々にお話を伺ふといふことに致したのでありますが、矢張り一人一人のお話を別々に伺ひましても單調になり易いと思ひまするし、一つは昔學校に關係して下さつた方々の御健在の御様子を一堂に會して拜見することゝも我々の非常な愉快でもありまするし、又お集りを願つてお話があつちこつちから出たら、其結果御話がはづみ、御話に變化があつて、讀む方も非常に興味が深いことになりはしないかといふので、この頃方々で行はれて居ります座談會といふ形式でするといふことに致しまして過日その趣意の御通知を差上げた譯であります。非常に御多忙の折にも拘らず遠方までおいで下さつて、主催者側といたしまして誠に感謝に堪へません。まだ他にも御通知を差上げた方もありますが、一番舊い方から申し上げますと高田先生は御病氣の爲に御缺席、鈴木喜三郎先生も御差支の爲においでになれず、原嘉道先生、小山溫先生も據ない御差支の爲においでになりません、是等の方々には何れあとから御伺ひしてお話を願ふやうな形になるだらうと思ひます、こちらの通知漏れで遺憾に思ひますのは副島先生であります。つい通知を落しました爲においでを願へなかつたのは誠に残念であります、惡しからず御諒承を願ひます。尙ほ他に校友の方で御通知を申しましたが、既に文書に認めて御送り下さつた方もありまするし、御差支の爲め御缺席になり、結局、今夕おいで下さつただけに留つた譯であります、それでも關先生のやうに創立の間際からおいで下さつた方とか永々御世話になつた牧野先生とか、又渡邊さん上原さんのやうにずつと初期の頃の卒業生の方がおいで下さつて、私ども斯ういふ會を催しま

した趣旨が、お集まり下さつた顔觸だけでも貫徹し得たことを非常に愉快地に存じます。先程は極めて粗末な食事でありましたが、その間に色々面白いお話が出ましたやうで、その時に速記に取りたい位に思ひましたが、あちらこちら混線して書取るのが容易でなからうといふのであの時には差控へた譯であります、どうか是からお話を願ふ間にも成るべく先程のやうな面白い話も入れて今夜はくつろいでお話を願ひたい存じます。實はあちらの室で腰掛けてお話を願つたらと思ひましたが、婚禮のために席を取られまして、本當の日本式の座談會といふものになつてしまひまして、洋服の方はさぞ御窮屈であらうと思ひますが、どうぞくつろいで御遠慮ないお話を願ひたい存じます。これはラヂオの放送と違ひまして、速記をあとで見たいとゞく機會もありますし、もう言つたら最後引込めえないといふやうな心配もない譯でありますから、どうか一つ御遠慮なしに十分お話を願ひたいと存じます。一寸お禮を兼ねて御挨拶申し上げます。

では早速であります私が進行係を勤めまして關先生から先づ御話を御願ひ申します。

○關直彦氏 大變面白い今夕の御催しであります、伺へば東京專門學校創立以來既に五十年。半世紀の前のことになつて居りますが、今から考へますと誠に感慨無量に思はれるのであります、私在此專門學校に關係したのはたしか明治十八年だつたと思つて居ります。本校の創立は十五年、さうしますと創立後三年のこととありますから殆んど創立當時に近い時代から關係を致しました、どう云ふ譯でこちらへ伺つたかと申しますと、最初早稻田の專門學校の法學部を擔當されて居つたのはたしか山田喜之助先生、岡山兼吉先生、砂川雄峻先生、此方々であつたと思ひますが、其内暫く經ちまして此三先生方が或る事情の爲めに御退きになりました。さうなりますと折角設けられました專門學校の法學部

といふものは全く空殻になつてしまつたやうな譯で、當時のことを回想致しますると、其當時の政府は早稻田を非常に憎んで居りまして、恰も大隈伯を反逆人の如くに思ひ、随つて大隈伯の創立に係る専門學校などは何だか反逆人の養成所であるかのやうに思つて居つたものでせうか、役人として早稻田へ出入りすることを甚だ忌み嫌つて居つた。それでありますから専門學校の法學部の諸先生が退かれますれば其應援を自然帝大の方へ求めなければならぬのでありますけれども、帝大の先生達も迂つかり早稻田へ参りますと免職になるやうな虞がありますから誰も來る人がなかつた、追がの専門學校の幹部諸君も殆んど之れには弱られまして、誰か政府と關係のない法律を學んだ者を引張つて來たいと思ひましても其人がなかつたのであります。其時に私は日々新聞の記者を致して居りまして、まだほんのひよつこ記者でありました。福地先生の下に指導されて新聞記者の見習をして居つた時代であります、高田君が私の所を訪問されまして、今度専門學校で折角法學部を置いたけれども三先生が行つてしまつた、詰り空明きになつてしまつた、何かして君一つ來て暫く助けて呉れないか。まア何ですな、空穴を埋める役になつて呉れないかと言ふのです。勿論私は學者でもなし、そんな任ではなかつた。強て御斷はりをしたのですけれども、どうも仕方がないから是非來て呉れろと言はれる。一體私は此學校の創立に關係ある高田君、市島君、坪内君などとは同窓で誠に仲の宜かつた間であります。所が政治上の立場が其時分違つて居つた。高田先生達は隈系統となり改進黨の幹部でありました。私は日々新聞の記者であつた關係上、其當時は福地社長が帝政黨といふものを組織しまして、之が純然たる政府黨でありました。でございますからして私も矢張り其中へ捲込まれて居つたのであります。改進黨と帝政黨とは全然政治上反對の立場に立つて居つたのですから、一寸こちらへ伺うのが變な工合であつたのであります。併し其當

時のことを思つて見ますと、政府筋では何だか意地悪く大隈伯の計畫になつたる學校を苛めるやうな傾きがありまして誰も奮つて行く人がないといふは誠に氣の毒な譯であるし、又學問とか藝術には國境はないものである、何も政治上の立場が反對であるからといつて其反對の場所へ行つて學術の講演をするといふことは何等差支へあるまい、斯様に私は思ひまして、高田先生に宜しうございます、それでは暫く其穴埋を致しませうといふことで、こちらへ參ることになつた。私が其時分に受持つて居りましたのはオースチンの法理學でありました。さうして英吉利の訴訟法もやつたかと思つて居ります。其時に同僚として法學部へ參られましたのが三宅恒徳先生で、之は雪嶺さんの兄さんであります。三宅先生と私と二人で暫時法學部を繼續して居つたと思つて居ります。其當時に於きましては仲々學生諸君は有力なる人が澤山居りまして、此所に居られる渡邊亨君、それから野間五造君などは仲々の才子且つ頗る惡戯者であつた。今御目に掛ると斯う云ふ老體になつてしまつたけれども、昔は仲々やかましいきかなかつた人です。私は丁度十八年十九年二十年とこちらへ參りまして、二十年に歐羅巴へ參りました爲めに暫く休んで居りました。併し此三年の間に私共が接觸致しましたる學生諸君は段々と其業を終へ社會に出て非常な成功者になつた人が澤山あります。仕事をして大なる成功を遂げて今は故人になつた人もある。さう云ふ次第で、歸つてから尙ほ引續き御手傳ひをしたいと思ひましたが、實は福地氏が日々新聞を止められまして、全責任を私におつ被せられましたから、逆も出て御助けをするといふ餘裕がありません。其一つの仕事さへ私の身體に荷ひ切れぬ程の重任でありましたから、そこで止むを得ずこちらは御免を蒙りました。丁度其時分に此所の卒業生で日々新聞に私が居ります時に來て御助け下さつたのが此渡邊亨君野間五造君であります。大變御厄介になつたのであります。其當時に於きましては早稻田は

僻地であつたものですから私共の宅から参りますには随分遠かつた。勿論電車もなければ自動車もある譯でなし、人力車で以て駈付けて参ります。時間が遅くなると二人曳で駈付けたこともあります。たしかこつちへ來ます途中に大變廣い茗荷畑がありました。今はどうなつて居るかわりませぬが、茗荷畑があつて、そこを通つて來たことを覺へて居ります。丁度私が早稻田へ参ります時の十九年に當時の内務大臣の井上伯から私に馬を一疋呉れました。尤も私は馬に乗ることは非常に下手であります、其馬が非常に柔なしい馬でしたから、それに乗つてよくこちらへ参つたのであります。参ります時には天氣の好い日などは其馬に参りまして意氣揚々として参つた。茗荷畑を通つて参りました。所がこちらへ参ります時には馬も柔なく歩いて呉れましたが、歸りには馬が腹が減つて居るものだから仲々ゆつくり歩いて呉れない、一目散に駈けて歸る、所が私の家には厩がない、私は小さい借家をして居りました。四五町離れた所に九段の馬場があります、其馬場の厩に其馬を下宿さして置いた、だから馬は一目散に駈けて行つて其厩の自分の下宿屋の方へ這入つて行く、仲々どうして幾ら手綱を引締めても逆も承知しない。ずつと這入つて行く、私はどうにも仕方がない、餘り駈けるから落ちないやうに馬の背へしつかり掴まつて居る、馬は其儘ずつと這入つて行くと云ふやうなこともありまして。併し馬の御蔭で以て大分時間も助かりましたし天氣の日などは宜い運動にもなつたと思ひます。さう云ふやうなこともありまして今當時のことを追憶しますと、もう五十年近くなつたかわらぬと思ふと、實に感慨無量で何とも言へぬ。考へて見ると自分の年は今年七十六になつて居る、まだ其當時のやうな青年時代の心持がして居りますけれども、來年は喜の字で甚だ恥かしい譯ですが何年經ちましても私は依然吳下の阿蒙で、其當時こちらへ参りました時より少しも進歩して居ない。却つて自分が教へたといふと甚だ恥かしいけれども講義

をして上げた諸君の方がずつと偉くなつて居る。現に非常な大家になつて居る人もあり或は非常な文士になつて居る人もある。私は五十年依然たる吳下の阿蒙たることを恥る次第であります。是れ丈け申し上げます。

○寺尾氏 高田先生に五十年の思出話をして頂きましたが、其中に關先生に御願ひして此所へ來て下すつたことを非常に徳として居られます、之にそれが書いてあります。

○關氏 實を申すと良い先生があれば宜いが、良い先生を搜しても何處にもない、殊に官界方面の關係から良い先生は來られない。それで私のやうな者を一寸場塞げにしたと云ふ譯です。

○中村萬吉氏 一寸先生に伺ひますが、其頃は學生の數は何人位でしたか。

○關氏 さア何人位ありましたらうか、非常に少なかつたやうに思ふ。

○寺尾氏 校友名簿を調べて見たのですが、十八年の卒業生が四十二名、十九年が三十名、二十年が十七名、二十一年が十六名です。

○渡邊亨氏 それは政治科も一緒です。

○中村(萬)氏 年齢はどうでした。

○關氏 生徒と先生と餘り違はない。

○渡邊氏 其中に居つた横井時冬君、之は横井春野さんのお父さんですが、此人は十四五も上でしたが、無論先生などより上でした。何でも横井さんは其當時田舎の區長さんか何かして居つた人ですが、後に文學博士になりました。

○前田多藏氏 さうです、後に高等商業の先生をして居つて論文を書いて學位を得られた。

○渡邊氏 私の組からは二人博士が出て居る、一人は高根義人君、一人は横井さんです、又私のやうな何も知らない卒業生もある。

○寺尾氏 今度は上原さんに御願します。

○上原鹿造氏 私は明治二十三年の四月に邦語行政科といふのへ編入試

験を受けまして、さうして始めて早稻田専門學校へ入學したのであります。其時の編入試験といふものは一年は別に學校へ出なくても講義録を読んでそれで二年に編入することが出來た。併し私は二十三年の半期だけの編入試験を受け四月に入學をしてさうして二十五年の九月に卒業した。其時は九月が卒業期であつたと覺へて居ります。其年の十一月に辯護士試験を受けることになつた。それは唯今の上野の博物館の所で試験を施行された。所が如何なる機みか試験場に試験の問題の印刷にしたものが二三枚落ちて居つたと云ふことで、試験漏洩問題が非常にやかましくなつた。それから段々検事も立會うといふやうなことで大騒動を起して其時の試験は全部無効といふことになつた。私共幸ひ此刑法刑事訴訟法の二つだけは試験を受けて居つた、さうして自分ながら之は意外に出來が宜かつたと考へて居つたのですが、全部無効でやり直しだと云ふので非常に失望したのであります。それから翌年の明治二十六年の二月に試験のやり直しがあつた。其試験を受けて幸に及第することが出來ました。唯今關先生の御話に依ればどうも専門學校には其當時餘り法律家の良い教授を迎へることが出來なかつたといふ御話でありましたが、私共の居つた二十四五年の頃に於ては専門學校の法律科の先生には相當の人を得られて居つたと思ふ。其當時江木衷博士、磯部四郎博士、平田讓衛先生、岡野敬次郎先生、原嘉道先生、松崎藏之助先生、奥田義人先生といふやうな立派な學者が法律の講義に従事されて居つて、其内でも殊に私共が深く感じまして今日でも尊敬の念を去ることの出來ないのは平田讓衛先生の民法の講義でありました。それから原嘉道先生の海商法の講義、岡野敬次郎先生の行政法の講義、奥田義人先生の親族法の講義、是れだけは今日私共が法律家の一人として世の中に立つて居られるのは全く其先生方の御蔭で、實に其講義の親切にして、而かも其學問の蘊奥を極めて居られたといふことは感謝の念を去ることが出來ぬ。それ

迄の間は本當に早稻田の法律科といつたら世間に餘り重きを置かれなかつたといふやうな感じが致します、私共入學して以來といふものは以上申上げるやうな先生が續々として學校に來られ講義をされて居つたのであります。之には我々は大に満足の意を表して居ります。

それから其當時の私共の一ヶ月の學資がどの位であつたかといふことを考へて見ると、私は七圓五十錢、之は寄宿代、月謝、自分の小遣も入れて此位の額で一ヶ月支へることが出來たのであります。第一に寄宿舎の費用が一ヶ月二圓三十錢、月謝が一圓八十錢であつた。先づ七圓五十錢あれば優に一ヶ月を支へることが出來た。併ながら之は苦學生の部である。普通は先づ九圓から十圓と云ふ學資の人が多かつた。之が中の上といふ所であつた。而して私は最初は矢野文雄先生の所に厄介になつて居つた。其時先生は赤坂の表町に居られた。赤坂の表町から早稻田迄は殆んど一里以上もありませう。それを屈托なしに毎日々々此處へ通つて居つた。今日の學生から見ると誠に想像も及ばないやうな境遇で、我々は苦學して來たのであります。今日の學生諸君に對して我々の學生時代には誠に僅少の經費を以て而かも相當困難なる状態の下に勉強をして來たのであると云ふことを多少考慮の中に入れて貰ひたいと常に私は感じて居る。唯其當時最も自分の氣強く感じましたことは得業生の中に黒川九馬といふ人がありました。丁度大隈侯爵の御母堂がなくなられた時に専門學校の教授及び學生一同は學校より二列の行列で御寺へ御送り申上げた。其際に其二列の中には犬養毅、島田三郎、或は尾崎行雄といふやうな大變な名士が揃つて居られたのであります、其先頭に立つて指揮命令をした人は今申す黒川九馬君である。威風堂々たる黒川九馬君である。其後ろに島田とか犬養といふやうな人が付いて來ました。それを一々命令をして其行列を正しく進ませて居つた。あの人は誰かといつて聞いて見ると、黒川九馬といつて専門學校の校友であるといふこ

とを聞きましたから、私は自分も卒業したらあの位な人にはなれるかといふことを感じたことを今尚ほ覺へて居ります。それが學校に來て一番最初に、俺が卒業したらと考へた第一の希望であつたのであります。之は餘談に互りますけれども黒川といふ人は非常に鋭敏な人である、さうして餘程早く出世をした人であります。年若くして或る鐵道の大會社の重役になつた人である。然るに此人が又大變な見得坊な人で、渡邊亭君に聞くと、渡邊君と二人で或る時……

○渡邊氏 それは僕ではない。小泉清志といふ男と一緒にその黒川(當時實司といつて居た)が出掛けたので、小泉が白狀したのだが實に面白い。先づ馬場下の小倉屋で蕎麥を食つて腹を拵へてから、酒は、蕎麥屋の酒は高いので堀部安兵衛の酒屋へ行つて枡の隅から飲んだ。それから、又、その先に出掛けたののだが、其處で、黒川は先刻の西洋料理は旨かつたとか、「フライ」よりも「ビフテキ」の方がよかつたとか、「ビール」「ブランデー」「ベルモット」は結構だつたとか、あらゆる西洋料理の知識を羅列して頻りに氣焰を擧げた。その上、當時はやりの鞭聲肅々夜渡河の詩吟をやつた處、急に氣持ちが悪くなり、とうとう尾籠の話しだが反吐した。驚いて介抱すると同時に、その吐いた物を見ると蕎麥ばかりで肉類は影も形もない。すると黒川は苦しい息の下から「オイ小泉」と呼んで、其時言つた言葉が面白い。「オイ小泉、あとの蕎麥だけ止せば宜かつたなア……」(大笑)それから黒川のことを「あとの蕎麥」と言ふやうになつた。之は有名な話です、其小泉といふ男が又面白い男で、私と同じ甲塾に居つたが、或る時私が夜遅く筆記を読んで居ると、向ふの室で小泉は友達と將來の志を語つて居る、小泉の曰く、俺は卒業すると先づ黒い洋服を着て(之はフロツクコートのことです)演壇に登り諸君と呼ぶ、さうして牛肉へ玉子を入れて食つたら人生の望み足ると言つた、私は其時十七八でしたが彼は二十二三でしたらう、それが私はおかしくて堪らない、止せ

ば宜かつたけれども、翌日それを素つ破抜いたのです、さうすると此野郎生意氣な奴だといつて擲られましたが、黒い洋服、演壇に登り諸君と呼ぶ、牛肉に玉子を入れて喰つたら人生の望み足るは面白いでせう。

○中村進午氏 其時分は牛肉全盛で、偉くなるには牛肉を食はなければいかぬ風であつた。

○前田氏 黒田君のことを高田先生は始終かう言つて居られました。黒川君位見識の優れた人は珍しい、あれがもし官立大學の卒業生なら外交官にならうが役人にならうが立派にやられた人だ。早稻田出身でなかつたら必ず立身されて居つたであらうと。晩年輕い脳溢血を病みそれが快癒しないで家政淪落の裡に遂に亡くなりましたが誠に惜しい人でした。鐵道敷設法といふものは實に同君の起案に基いたものであります。

○關氏 黒川君は鐵道協會へ這入つて仲々幅を利かして居つた。

○渡邊氏 甲信鐵道といつて甲州と信州の間の鐵道、之を望月右内と一緒にやられた。

○關氏 望月右内といへば郷里で縣會議員をして居りまして私等を推薦して呉れた有志だ。後にこちらへ來て浪人して居つた時に私の所へ來て何か仕事はあるまいかと言ふので、それなら鐵道協會へ這入つたら宜からう、それは黒川さんに頼んでやらうといつて、黒川さんに頼んで這入つた。それから段々偉くなつて鐵道會議の議員にもなり代議士にもなり鐵道會社の重役にもなり大に成功したが、其端緒は私が黒川君に頼んで、黒川君がやつて呉れたのが始めだ。

○上原氏 先刻の話を續けますが、黒川君や渡邊亨君などは餘程早く世の中へ出て發展された、兩君以外にも學校を卒業して社會に立つて名聲を博した人が澤山ありました。そこで私はさう云ふ人の眞似をして、さう云ふ人の跡についてやつて行きたいと常に考へて居つたのであります。それから見ると渡邊君などよりは私は餘程後輩であることは立證が出

来る譯である。随分多數の名士が學校から出て居る。歲月流るゝ如き此五十週年を迎へ昔のことを回顧すると實に今昔の感に堪へない譯であります。

○渡邊氏 黒川君昆田君時代迄が岡山先生それから砂川先生山田喜之助先生などが居られた時代で、それから、私共は其置いてケ堀を食つた連中です。私共が三年生になつた時に置いてケ堀を食ひまして先生が居なくなつた。

○中村(萬)氏 山田一郎さんは。

○渡邊氏 あれは政治科の方です、法律科の先生に三宅恒徳といふ方が居ましたが、此御方は英學はよく御出来にならなかつたらしい、何か厚い本を持つて來て講義を爲さる。講義と云つても「ザツト」の「イツト」で翻譯なさる丈けど、所が先生にもよく分つて居ないらしい、質問したつて更に要領を得ない。それから山田喜之助先生、之も學問はよく御出来になつたに相違ありませぬが「リンドレー」の會社法を講義なさる、其本を読まれる、讀まれるから意味を聽くと奥へ行くと分りますと言ふ、何度質問しても奥へ行くと分ります、凡てそれ一點張りで通した、こつちには少しも分らない、關先生の法理學などは無論感心して聞いたのですけれども、三宅先生の講義などは少し眉唾で聽いた。それから股野時中といふ先生がありました、それが又非常な豪傑肌の人で、劍を持つて來て教壇で「匂」ひがどうだとか、何がどうだとか言つて、劍の講義を爲さる、確か佛蘭西の行政法を受持つて居られたが、御本人にもよく分つて居られたのかどうか疑問である。

○中村(萬)氏 磯部さんが車へ乗つて來て車代がないので困つて居たので學生が其代を貸したといふのは本當ですか。

○渡邊氏 そんなこともありましたが、それは磯部醇さんです、此御方は幾らか法律を御存知でした。

○中村宗雄氏 先程關先生は英國の訴訟法を御教へになつた、其時分にはどう云ふやうな講義をなさいましたか。

○關氏 もう忘れましたが、其時分日本には訴訟法はなかつた、原書の意味を取つて講義をしたと思ひます。

○中村(宗)氏 教科書のやうなものはなかつたのですね。

○關氏 無論ありませぬ。

○中村(宗)氏 皆筆記だつたのですか。

○渡邊氏 唯演説されるのを聽いて居たのです。

○上原氏 私は其時から自分に最も必要なことであつたと思つたのは、どう云ふ學科であつても必らず講堂に出て 直接先生の講義を聽くといふことを自分の主義とし又最も愉快として居つた、外の學生連中は此時間は面白くないから缺席するとか、此先生は嫌ひだから聽かないといつて惰ける者が澤山あつたやうですが、私は如何なる學科でも必ず出席することを學生の本分と心得て居つた。だから、私のノートといふものは殆んど同級生の何人かの常に奪合ひになつて居た。出てはちやんと筆記を取つて居つたが、其事は最も自分の一生の大切なものとして永く保存して居つた、然るに不幸にして其ノートは大正十二年の震災で焼けてしまつた。私は外に能はないが唯字を早く且つ綺麗に書く、是れ丈けは自分の得意であつた。だから私のノートは何人が見ても直ぐ分るやうになつて居つたので、方々から借りに來る。又それを喜んで貸してやつたといふ譯である。私は子供などに對しても常に此事を自慢らしく話して居る。研學に最も必要なことは目を通して頭へ入れることも勿論必要には相違ないが耳を通して入れることが、幾倍かの收獲あることを常にかけて居つた、之が爲めに自分は學科と云ふ學科に殆んど缺席したことはない。私の子供に目下京都大學に在學中のものがあるが、最近私が京都へ行つた時談偶々此事に及び、お前は人にノートを借りて寫すやう

なことではいけない、自分で先生から直接に講義を聴く程よく頭へ這入るものはない、だから本を読んで居れば學校に行かなくても宜いといふ考へだけはどうしても棄てゝ貰ひたい、此心掛は在學中終始一貫したる信念とせよと懇々言つて來たが、私は學生時代から其考へを持つて居つた、今日でも若い學生に遇うとさう云ふ話をして居るが兎角私の考と違つた考を持つ學生の多いことは甚だ遺憾である。

○寺尾氏 能く講義を聴いた學生は頭へよく這入つて居る、全く御話の通りです。

○關氏 五十年前はいゝ加減のものであつた、私共學校を出ました時は何程の知識もないけれども、それが當時に於て學校を出れば學者として尊敬された。實にゑらいもので、卒業せぬ前から大概賣れて居つた。百圓位でどしどし賣れて行く、役人になると直に奏任官になつて七等出仕、之が又其時分にはゑらいものであつた。今日の人達は知識は進んで居るけれども、學校に居る學資よりも少い月給を取らなければならぬことになつた。それさへ仲々取れない。今日の學生とは大變な違ひです。昔は私のやうな怪しげな講義を聴いた人もある、それで學校を出れば一廉の早稻田の學者だといふて幅を利かしたものです。

○寺尾氏 今度は中村先生に願ひます。

○中村(進)氏 私は早稻田大學で講義をする前から妙な關係がありました。私の實兄前田盛江と云ふ者が居りまして、私の一年前の東京の帝國大學の卒業生でありました。それが卒業しますと、兄は明治二十六年に卒業しました、さうして學校に居る時には高田先生に保證人になつて頂いた、さう云ふ關係のもので、さうして大學を卒業しまして兄は直ぐ東京專門學校へ講義に來て居りました。國際公法を講義し、ラバンドの國法學を讀んで居つたさうです。それがたつた一學期、其頃は先きに上原さんの御話のやうに學年が九月から始つたのですから 僅かに半年經

つた時に腸チブスに罹つて忽ち死にました。其頃に山中といふ人が、英吉利の Levi の國際公法を譯された、それを東京専門學校の講義錄に出されて居りました。それは其死にました兄が見て居つたのですが、兄が忙しいので私に見よといふので、私は其御蔭で其山中さんの譯されたのを英文と比較して見て居りました。それが講義錄に載つて居ります、其頃私は高田さんの所へ伺ひましたし、又其時に知己になつたのが田中唯一郎さん、唯今の小久江成一さん、それから高田さんの弟さんの俊雄さんであります。當時早稻田の出版部は殆んど其三人の方でやつて居られたと記憶しますが、それから兄が死んだので、其翌年私が卒業すると國際公法をやるやうにと云ふことでありました。それは鳩山先生が前に萬國公法といふ名前で講義をして居られましたが、其跡を私の兄が一寸の間やつたのですが、明治二十七年に私が卒業致しまして講義を致しました。其時に先程食堂での御話に前田さんが居られた。先程關さんの御話で想ひ出したのですが、私の先生であつた方が私に役人になれと言はれた、其時私は内務省と大藏省で務めないかと言はれて居つたのですが、私は役人になる氣はどうしても出ない、飽くまで學問をするのだと言つて直に大學院へ這入りました。大學院へ這入ると二年間は何等職に就くことは出来ない、それから東京専門學校へ講義に出たいと申しました所が、或る先生が、(それは今生きて居られる先生でございます)、あれは君、改進黨の學校だよ、あんな所へ行つて教へるなんてとんでもない、だから止めにせよと云はれました、其先生は官吏でもなく又當時の自由黨でもない人ですから改進黨を憎んで居た人でもなく、自由黨を好いた人でもないのです。私はそれを押切つて専門學校へ來たのですが、其時には同年に卒業した岡松參太郎、春木一郎なども専門學校の先生になつた。私は何しろ改進黨の主義と自由黨の主義とどう違ふのやら、世間で誤解した様に大隈さんが藩閥政府を倒す爲めに此學校を拵へたのや

ら、そんなことは少つとも考へて居らなかつた、唯自分の様な未熟者に此の學校で講義をさして下さるとは非常に有難いことだと思つて大喜びで講義をさせて貰つたに過ぎないのでした。それで來て見ると私の同級の春木一郎といふ人、この人は其當時控訴院長であつたか検事長であつたかの春木義彰さんの息子で、東京帝大の教授をせられて羅馬法の大家であります、それが、専門學校の生徒は不埒至極だ、俺達が來て講義をしてやるのに反對をするさうだが、そんな不埒な者共に教へてやらぬと云つて講義をしなかつたことを覺へて居ります。それから私は講義をすることになつたが、受持の國際公法は法律科と政治科と合併でありました。眞先に驚いたのは教室に這入りまして始めて講義をした時です。之は前田さんにあとで話して戴きたい。私の記憶違ひがあるか知れませぬが、一遍か二遍講義をした其始めに自分の講義の内容を覺へて居りますが、國際法は法律なりと云ふことであつた。それに學生が反對で、國際公法といふものは法律でないといふので反對をする。丁度其當時日清戰爭が始まつた頃で、私は支那のことに付いては漢學を少々やつて左傳や戰國策を読んで居たから其中で今日の歐羅巴の國際法は餘程似た所があると云ふて自分で得意で居りました。それから私は教室へ這入つて講義をやる、所が少しやり出すと學生がバタバタ出て行く、それはどう云ふ譯で出て行くのか私には分らぬ。仕方がないから暫く見て居ると又バタバタと這入つて來る、さうして講義を聽いて居る、それが又暫くするとバタバタと出て行く、それを何遍も繰返す、幾ら繰返されても此方は馬鹿だから何の爲に斯ことをするのか分らない、此の學校は斯様なことをする慣習かと思つて居りました、さう云ふことが二週間ばかりありました。所が今の尾崎行雄さんの弟さんに尾崎行昌といふ人が居ります。之が私の友達で或時私の所へ遊びに來た、其時に尾崎さんは小石川の第六天の今の徳川家の住居に居られた。其尾崎行

昌さんが私の所へ来て、君は専門學校で講義をやつて居るが生徒は教室から出て行くといふことだ、それは君を排斥して居るのだ、あれ迄にされてもまだ君には分らぬのかと言はれました。私はそれで初めて成る程あれが排斥の手段であつたかと氣が付いたやうな譯で、それから高田先生の所へ行つて私は排斥されて居るのださうですが、どうしませうと言ふと、そんなことは構はない、やつて居れやつて居れと申されました。さうすると學生は高田さんに私のことを言つても聽かれないので、鳩山先生の所へ談判に行つた。鳩山さんは俺はそんなことは知らないといつて取合はない。それから大隈さんの所へ談判に行つた。大隈さんはどう云ふ答をされたか知りませぬ。私は相變らず講義をやつて居る内に十月十一月も過ぎて十二月になつた。すると第三學年の三人の代表者だと云ふ人が自宅へ來られて、私共三人があなたを排斥した發頭人だ、今日は謝まりに來た、今迄排斥をして濟まなかつたと云ふのです。其人の名は一人は並木幾彌、一人は松澤知主、と云ふ人であつたと記憶して居ります、残りの一人は名を覺へて居らないが、さう云ふ面白いこともありました。

其時分は先程關さんの御話のやうに此邊に茗荷畑があつて其前に御稻荷様がある、こちらの方は一面の田圃であつた。道といつても本當に狭い道で、人力車が一臺漸く通る位、向うから人力が來るとこつちは横へ避けなければならぬ。私は小石川の竹早町に居りましたから始終徒歩で來た。四十分位掛りました、何しろこゝはすつかり田圃であります、畔で蛇が蛙を呑まんとして居る、蛙に同情して蛇を殺したり、始終そんなことをして居つた。尤も私は一週間に一遍しか來なかつたのですが、其頃の學生といふものは、文科の方は存じませぬが、何でも三百人位しかなかつた。法律科は平田讓衛さんが主にもやつて居られたが、平田さんが御止めになつて高根義人さんが代つてやつて居られた。此

時分に私は相變らず講義をやつて居つたが、先程も排斥されたことを御話しましたが、まだ斯う云ふことがあつた。それは教室で講義をして居ると、それは前田さんではなかつたと思ふが、私の直ぐ前へ來て講義を聽いて居た一人が机に頬杖をつきながら「今の若いのはこんなことを言ふかなあ」と大きな聲で申しました、理窟を言ふなら此方も理窟で應答するが、此時はどうして宜いか、答に困却致しました、それは二十八年のことであつたと覺へて居る。震災で潰れたあの講堂で講義をして居ると明治二十九年の冬のこととありますが學生の一人が起立して大聲で「先生の講義は一つも秩序が立つて居りませぬ」と言ふのです。それには當惑しました。但し其學生は間もなく發狂して死んださうです。

それから高根義人さんが明治二十九年の夏頃に文部省留學生として、渡歐されまして其後に法律科の世話をする人がないと云ふので岡松參太郎さんと私と二人が共同でやろうといふことで二人で御世話をする事になつた。此時分の圖書館はあの震災で潰れた講堂の入口の階下の一部分にあつて、それは實に狭いものであつた。石井藤五郎さんといふ人が一人で貸出もすれば本の整理もやれば總ての事をして居り、實に微々たるものであつた。明治三十年の一月に私は歐羅巴へ留學に行きまして三十三年の三月に歸つて來ました。それから其後にも一遍大正十一年に外國へ行きましたが、それを加へまして明治二十七年から今日迄三十八年間早稻田大學の御厄介になつて居る譯でございます。何程精神的にも物質的にも恵みを受けたか分らない。尤も物質的といふと、此頃の早稻田大學は實にゑらいものになつて居ますが、私の始め來ました時には時間給で一時間一圓宛貰つた、一月に八時間講義しまして八圓宛貰つて居ましたが先程上原さんの御話のやうに、其頃八圓といつたら大金でございます。竹早町から人力車に乗つて早稻田まで來て二時間待たして置いて家へ歸りまして賃錢が十五錢、天麩羅蕎麥が三錢五厘の

時代でございました。

それで私共卒業しました時代は日本の法律といふものは如何にも幼稚であつた。幸ひ其國際法といふ廣汎、且漠然たるものをやつて居りましたので、どうか斯うか今日迄無難に勤めさせて頂くことが出来たのでございますが、斯う長く居つた間には色々面白いこともありました。明治三十九年か四十年の頃でありましたか、此時は例の田淵仙人と言はれて居る方、それから今偉い人になつて居る山道さん、比佐さん、あの人達の時代であつたと記憶しますが、擬國會といふのを開いて盛んに辯論を闘はした。其時に朝鮮國王を日本國公爵となすの可否といふ題で討論してよいかと私に聞かれましたので、假設問題だから宜しいでしょうと答へまして討論の當日になりました、所が朝鮮人の人達が三百人ばかり早稲田大學へ押掛けて來た。さうして斯う云ふ問題を出すといふのは不埒だ、それは中村の奴が認めて擬國會の題にした、實に怪しからぬといふ騒ぎ、其時に田中唯一郎さんが私にあなた何處かへ逃げて御出なさい、あなたが認めたと言ふのだから、あなたはたゞき殺されるかも知らないから早く逃げなさが宜しいと云はれまして、私は逃げたことを覺へて居る。長いことでございますから其間には色々様々な事があつた。學校の騒動の問題などもありましたし、それから早稲田大學の校外教育、巡回講演の時に御供をして廻つたこともございましたが、此長い間には能く講義を聽かれて今偉い人になられた方が幾らもある。あの三木さんなども随分暴れた人でありましたが、矢張り出色の人は學生時代から變つて居ります。何しろ時勢の變遷といふものはあらゆるもので、其當時改進黨の學校とか何とか言はれて居つたのが、今日は世界の權威ある學校となつて居ります。よく是れ丈け大した學校になつたものだと思ひますが、矢張り之は大隈侯や諸先生方や校友方の御蔭、一つは時勢の御蔭、實に有難い世の中だと思ふて居ります。日本の國が偉くなると

共に支那の學生が來た。其話に付ても随分愉快なことがあります、まだ此後で皆様の御話がありますので、自分のことばかり詰らぬことを申上げて失禮でありますから之れで止めて置きます。

- 中村(萬)氏 其當時、先生の御宅に出入りした支那留學生には、どんな人が居りましたか。
- 中村(進)氏 この頃の林榮君、劉崇傑君など私の家に始終來たものがあります。
- 前田氏 あの林榮、薩端、劉崇傑、張肇桐、張繼、嵇鏡君等多數の方が寄宿に居りました。
- 中村(進)氏 髪の毛を結つてゐたのが劉崇傑君でしたね。
- 前田氏 金邦平君、あれはハイカラでしたよ、それから唐寶鏐君は支那で辯護士をしてゐます。
- 中村(進)氏 細君が日本人でせう。
- 大橋誠一氏 載鐸殿下がこつちに來た時に隨行員として來ましたね、明治四十年頃でしたか……。
- 前田氏 一番才のあつたのは陸宗輿君でした。しつかりしてゐたのは劉崇傑君でしたね。
- 牧野菊之助氏 莊璟珂といふ支那の代理公使があつたね、あれが此處を卒業してから東京地方裁判所に事務見習に來た、私が所長の時に 見習はして呉れ、國に歸つて裁判官をやるからと言ふので、本當にやるかといふとやるといふので、民事から刑事から一と通り判決文まで書かしたが、凡そどれ位居るかといふと一年居るといふので、それぢやその間のプログラムを拵へてやるといふので、その通りやれと言つて拵へた。そして法廷に行つて傍聽し、判決の起草もやりました。ところが眞面目にやりましたよ、そして一年ばかり居つて、それから檢事の方の事務も見たいからといふので檢事局に行つて頼んでやつた。檢事局には どの位

居りましたか、先づ一通りは見ました。そして國に歸つて控訴院長になつた。それを二年そこらやつて、それから外交官になつて、東京公使館の參事官になつて來た。

○中村(進)氏　そして公使の留守に代理公使になつた。

○牧野氏　私もあれに御馳走になつて、名優の梅蘭芳の芝居なども見せて貰つたことがあります。馬車に乗つて細君を連れてやつて來たこともあります。私は參事官になつて來たといふことは聞いてゐたが、まさか來やすまいと思つてゐると二頭立の馬車に乗つて富士見町の官舎に付けて挨拶に來ました。

○中村(進)氏　感心な人ですね。

○牧野氏　姚震といふ人も居りましたね、あれは大學部になつてから第一期の卒業生ですね。

○中村芳雄氏　さうでした。

○牧野氏　あの人もよく出來た人で、矢張り地方裁判所にやつて來ました。

○前田氏　江庸君と姚震君とはよく出來ました。

○中村(進)氏　江庸君は留學生監督でやつて來ました。

○牧野氏　その後もう一人何とかいふ人が來たが、それは餘り眞面目にやらずに半年位やつて國に歸つた。姚震などいふ人は安福派で一時は羽振りを利かせて大審院長までやつて非常な勢であつたが、安福派が失墜してからはどうなつたか、今どうして居るでせうか。

○前田氏　董鴻禕君は學生監督で來て居た。錢恂といふ人の甥で、錢氏は早稻田大學に多數の書籍を寄附して行かれた。大變いゝ人でした。學生監督で來た中で一等の人でした。

○中村(進)氏　どうしても日本人を細君にすると云つて家では承知しなかつたが、大變問題になつたやうでした。

○前田氏　なかなか支那人も相當の人が來て居りましたね。この頃はさ

うでもありませんが、先立つての汪榮寶君は早稲田大學の歴史地理を出た人でありますね。

○中村(芳)氏 居つたことはあるが出ないです。

○前田氏 これは近來日本に來た公使の中で一番學問のある人で、この人はもつと日本に居りたかつたらしい、それから林檎君といふのは滿洲で法制局長官になつて居ります。

○牧野氏 この間來た人ですね、法院長ですね。

○前田氏 是は非常に眞面目な人で、丁鑑修氏に隨いて來たが、神戸の總領事も大分やつて居りました、林檎君は……。

○中村(進)氏 支那人は鼻つばしの強いものだと思つたのは、私が八幡の横に居りました時、一人の支那人が來て、主人に會ひたいといふ、早稲田の學生であるから何か聞きに來たのかと思つて會ふと、君の家の部屋を一つ借りたいのだがねといふ話、どうして借りたいですかといふと、景色が好いから借りたい、ぢや貸してあげませう。どこでも御覽なさいと言つて見させた。此處を借りたいといふのが十二疊の座敷、それと隣りの八疊、貸してあげませう、一日千圓ですと言ふと、先生驚いて逃げて行つたが、こつちを下宿屋か何か位に思つてゐたらしい。何事もあゝいふ調子でやつて居るものだらうと思ふ。

○寺尾氏 次は牧野先生に御願ひ致します。

○牧野氏 私が早稲田學園に關係をしましたのは、その月日は自分でも忘れてしまつたのですが、兎に角民法施行以前であつたことは確かです、明治三十年頃であつたらうと思ふのですが、それが學年の初めから來たのか中途から來たのか、そこも今覺えて居りませんが、何でも今の政友會總裁の鈴木君はその前から早稲田專門學校に關係して居つて、そして或る時私に對して君も一つ早稲田に來ないか、親族法の講義を一つ受持つて貰ひたいのだがといふ話、僕はさういふものを研究したことがない

と言ふと、いや平常から人事法に大分趣味があるやうに思つて居るから來てやつて呉れぬかといふ鈴木君の勧誘で、それぢや一つ引受けてやつて見ようかといふのが抑ゝの初めです。それから爾來引續いて親族法の講義もやりましたし、或る時には相續法も擔當したこともあるし、又後には物權法を擔當したこともあるやうに覺えて居ります。そして明治四十二年の五月に官命に依つてヨーロッパに参りました。丁度彼是れ一年ばかりです。それから明治四十五年二月に京都へ轉任しました。この時も一年ばかり。それから大正九年六月に名古屋に轉任したが、これも一年ばかり。この三度、前後を通じて三年ばかりは此早稻田に参りませんでした。その前後通じてずつとこの早稻田學園に關係をして居りまして、昭和二年の秋まで繼續して居つたやうな譯で、その間に専門學校は大學となり益々發展して参つた次第で、その間微力ながら多少の力を致したかと思へば、我ながら光榮の至りに感じて居るやうな次第であります。最初親族法を擔當いたしました當時はまだ法典調査會で民法の親族篇、相續篇を起草中でありまして、其草案は公表されて居らなかつた。私當時東京地方裁判所の判事で、極めて若輩で調査會の委員の人にお話をしてその草案を貰ふといふ譯にも行かぬから、舊民法の人事篇を土臺に親族法を講義しつゝあつたので、大學に居ります當時も別段に親族法を研究したといふ譯ではありませぬ。唯木下先生から佛蘭西民法の人事篇の講義を聴きたることあるよりして、佛蘭西法を參考としてそしてまあ人事篇の規定を土臺に講義しつゝあつたのであります。その中に法典調査會の草案が出來上りまして議會に提出されるやうになつて初めて草案が世間に知れたのであります。それで講義の中途から現行法の草案に基いて講義をしたといふやうな有様であります。その際私が一つ失敗したことがあるのです。それは今の親族法の婚姻の所に禁治產者が婚姻を爲すにはその後見人の同意を得ることを要せず

といふことが條文にある、それがどういふものであつたか、私の手に入れた草案には要せずが要すと誤植になつて居つた、それを自分はよく調べもせず同意を要するものだといふ風に講義してしまつた。それがその儘矢張り講義録にも載つてしまつた、所が後になつて見ると要せずになつて居る、それで誤りだといふことが分つたものですから、早速學生に對してそのことを謝つた譯であります。講義録の方も訂正したやうな譯であります。でその時代の講義録を記念のために取つて置いたのですが先年の火事で焼いてしまつて、その記念物が無くなつて自分は残念に思つて居ります。そんな失敗もありました。それから何年頃であつたか、どうも法科の講義は皆學生に筆記せしめるといふやうなことでは所定の科目が學年内に終らぬといふ虞があるし、又學生に對して筆記にのみ専念せしめて居つたのでは教授の要を得て居らぬから何とかしなければならぬといふやうなことから、確か高田先生の御發意であつたと思ひますが、法律科の方の各先生に對して一つ教科書を拵へたらどうか、民法總則は總則、物權は物權、各篇に付て一つの教科書を作つて其教科書に基いてそれを土臺としそれを講義本として講義をしようぢやないかといふ御相談がありまして、私共も如何にもその方が宜からうといふので、自分もその一部分を擔當し親族法に付て極く簡単な教科書を執筆し他の諸先生もそれぞれ受持の科目に付て總則は誰れ、物權、債權は誰れと云ふ様に分擔して執筆し、それを出版部で出版することゝなりました。それ以來その教科書に依つて講義したのでありますが、それも受持の先生が變つたり何かしましたから何時頃までさういふことをやつて居つたか知りませぬが、自然先生が變るに従つて教科書は使はなくなつた。使へなくなつたといふやうなことで、自然廢滅に歸したといふやうなことがあつたと思ひます。それから法科の方には討論會といふものが毎月一回はあつたやうに思ひます。民事刑事の問題を講師か

ら出し、それを掲示して學生に知らせ、一定の期日に大講堂で討論會を開く、その際には此處に居られる上原君など始終來られた。今内務政務次官をやつて居られる齋藤隆夫君、それから辯護士の羽田智證君、若林成昭君、さういふ人が始終來られて、又杉田金之助先生なども能く來られました。私も時々出席して學生と一緒になつて討論をした覺えがあります。それから或る年には民事刑事の訴訟演習をやつたら宜いといふやうなことがあつて、尤も最初は或る刑事々件を豫想しまして、その事件の審問判決をする、で學生が裁判長、陪席判事、裁判所書記、檢事、被告人及び辯護人となつて、例の講堂でその事實關係を取調べる、或は證人も調べるといふやうなことをして辯論判決までやらせたといふこともある、専らそれを學生にやらせて置いて、その後ろで我々が指導し又は口添へをして訴訟の實際の手續等を知らしめる、さういふことをやつたのも覺えて居ります。民事の訴訟などに付ては訴狀の提出から答辯書等も出させて、それ等の書類の送達等の手續もやつて、そして口頭辯論期日を指定し、その期日には矢張り辯論を講堂で開くといふことにし、結審の上その民事々件の判決を書かせて之を掲示し判決の雛形を學生一般に知らしむるといふやうなこともやつたやうに覺えて居ります。殊にその訴訟演習をやるに付ても裁判所の通りやるのであるから、裁判官は矢張り法服を着なければならぬ、法冠を被らんければならぬといふので、それを間に合せる爲に一時裁判所の我々の同僚の中から空いて居るのを借りて來て着せた。又鈴木君や私が自分の着古した法服などを學校に持つて來て置いたやうに覺えて居りますが、それほどの位續いたかどうかははつきり覺えて居りませぬ。最初私が講義を支持つた時分は、まだ大學にならぬ時ですが、法科の學生は凡そどの位あつたか、さう澤山ではなかつたかと思ひます。講師と學生との間柄は極めて圓滿と申しますか、極めて穏やかで、學生の或る人は我々の自宅に

も時々來て或は質問をするとか、今後の方針に付てはどうしたら宜からうとか、さういふ相談を受けたことが數次ありまして學生と講師との間柄は比較的親密であつたやうに思ひます、後日大學となつて、大分學生が殖えて來ると以前のやうな關係は自から薄ら いだかのやうにも考へますが、私が此の早稻田學園に參りましてから最初の數年間の學生中で在學時代より能く知つて居つたのは此處に居る大橋君とか、今辯護士をして居る平松市藏君、三木武吉君などであります、また卒業後司法官となり次で地方長官となり今辯護士をして居る和田純君なども時々宅に來た、それから最初判事となり、後に辯護士となり、先年死亡したる池田卓二君、大審院判事として死亡したる新保勘解人君なども學生時代から能く知つて居り、この兩君の如きは裁判所に奉職中は、私の部下に長く居つたといふやうな關係であり、學生時代から知合の間柄であるから公務上に於ても、又私的に於てもその情誼は深かつたといふ譯でありましたが、その池田君、新保君ともに早く死なれたことは痛惜に堪へませぬ。

兎に角私が此早稻田の學園に參りました 當時は牛込若宮町に住んで居つて、あそこから徒歩若くは車で學校へ來て居つたのですが、先刻もお話のあつた通り今の實業學校の附近にお宮があり、あの邊一面は茗荷畑であり、大隈伯邸の外、今の鶴卷町の一帯、あの邊一面は田甫であつた、矢來下から榎町を通つて協道に入ると一眸、田甫を隔てゝ向ふは目白の高臺を望むといふやうな譯で非常に眺望が好く、我々學校に通ふ者の眼を楽しましめるといふ状態であつたのですが、私など時々學校の歸途は態々田甫の中を通り抜けて關口の邊、今の江戸川公園のある附近、あの邊をよく散歩して歸つたやうな譯ですが、それが早稻田學園が發展するに伴つて茗荷畑は何時の間にか無くなつてしまふし、田地は埋立てられるし、今日のやうな立派な市街地になり、電車も通り乗合自動車も

通るといふやうな有様で、早稻田學園が發展すると共にこの附近は殷賑の巷となつたといふ譯で、長い間この學園に關係して居つた所の私どもにとつては、まあ今昔の感に堪へないといふやうな思ひが致すのであります。微力ながらもこの早稻田に力を致したと思へばこの五十周年を迎へる今日誠に喜ばしく存するのであります。

その外別段これと申してお話することもないのですが、何でも私が商科の民法要論の講義を受持つたことがあるが、その當時商科の學生は非常に多かつた、その中に私の遠い親戚の仲が一人居りましたが、それから或る時間いたのですが一體牧野といふ人は教場に来てニコリともしない、何時でも苦蟲を嚙潰したやうな顔をして居る、あいつをトツ笑はせやうぢやないかといふので學生間で色々相談して、それで色々やつて見たがニコリともしない、忌々しいから何とかしようといふので、丁度私が法學博士の學位を貰つた直後に、初めて教場に出た時に學生一同が手を拍つて先生お目出度うございますと大きな聲で怒鳴つた、その時私が何の氣なしに、少しニコついたので相であります。今日は珍らしく牧野は笑つたといふ譯で、學生の間で一つの話の種になつたといふことを聞いたことがあります。自分は何もそれ程恐い顔をして居る譯でもなかつたのですが、まあ學生からそんな風に思はれて居つたかと思つて實は苦笑した次第であります。まあその位のことであります。

○寺尾氏 中村先生や副島先生など笑ふことがありますかなど、學生からよく聞かれるのですが、殊に中村先生は滑稽な話をして笑はないので有名なのです。

○中村(進)氏 〔中村(芳)氏に向つて〕あなたは事務の方で三十年も居られるので、事務の方のお話をどうぞ……。

○中村(芳)氏 私が初めて當大學に奉職いたしましたのは明治三十五年の二月十六日で、東京專門學校と云つた時代であります、當時の事務

所は今東伏見に移し、運動部員の寄宿舎になつて居りますが、あちらに持つて行きます迄は文學部の教室になつて居りました、一番古い建物であります、その入口の突當りに庶務課がありました、そこに私は奉職したのであります。その庶務課に創立當時から居たといふ佐藤善長、この人が課長でありまして、その下に服藤君と田沼君といふ人が居ました。その左手の奥に會計課の部屋がありまして吉川義次、この人は専門學校が出來て二年目位に來た人で當時六十四五歳の老人でありましたが、それが會計課長、その下に川村、佐久間の兩君、これだけで總て會計をやつて居ました。それで部屋の三分の二程を帳場格子みたやうなもので仕切り、窓の方に會計が居り、反對の側は壁で仕切られて、その隣が教員室になつて居ましたが、教員室と申しても至つて狭いもので先生が二十人位集まるといふやうなことであつた、それを境にして三分の一程の所を通つて突當りに矢張り三分の一位、凡そ一間幅位、帳場格子で仕切られたところがあつて、その角の所にテーブルが一つ、これは學監のテーブルで、高田先生はその當時學監であられました。それから右手に幹事田中唯一郎さんのテーブルがありました。これが事務を執る職員全部で、學生數は約二千人位でありました。私が入つて一週間経たない中に困つた問題が起つて參りました、といふのはその當時は一學年を二期に分ち前期後期と云つて居つた時代でありますから、學年の初まりは九月で終りは七月になつて居ましたが、二月の末に前期の試験を行つて後期の授業は三月から始まるのですが、その前期試験の時間割を作れといふ譯で、入つたばかりで學校の様子が分らないので困りましたが、私も以前私塾をやつて居つた關係もあり幾らかは知つて居りましたので、前の書類などを見て作り上げました。當時學科は法學部と政學部と文學部とに分れ、更に法學部は法律科と行政科の二科に分れ、政學部は邦語政治科と英語政治科とに分れて居ました。法學部も以前は邦語法

律科と英語法律科、邦語行政科と英語行政科とに分れてゐましたが、その當時は英語の方は無く、邦語だけでしたから、邦語といふことを略して單に法律科と行政科といふことになつて居ました。

文學部は三科に分れて居まして、それは中間の文學部で、坪内先生が創められた和漢洋の學科を調和するといふ時代の文學部ではなく、三十二年に改正された、中等教員養成を主とするものであつて、哲學及英文學科、國語漢文及英文學科、史學及英文學科に分れて居ました。これだけが先づその當時の東京専門學校の學科であつて、その他に大學組織の先驅たる高等豫科がありまして、前年即ち三十四年の四月に開校されました。それで時間割を作るのに困りましたが、その時手が省けて助かりましたのは法學部の方で、法學部は唯今申上げたやうに法律科と行政科とでありましたが、學科目は大體同じことで、唯だ行政科は財政學とか經濟學とか、哲學といふやうなものが加つて居たやうに思ひます。以上が私の初めて困つたことでありました。それからその年の九月に早稻田大學と改稱、法學部が大學部に編入されて法學科となり政學部は英語政治科が無くなりまして……無くなつたのではなく、三十七年まで續いて居ましたが、それが政治經濟學科となり、それから文學科と斯う三科が大學部となりました、その外に専門部が出来まして、從來の法律科即ち邦語法律科が専門部の法律科となり、邦語政治科が政治經濟科となつたのであります、そしてその年の十月に早稻田大學創立、東京専門學校創立二十年記念式典……從來も確か五年目毎に式典を舉げて居つたが、その年には今までにない盛んな記念式典が行はれました、その時に伊藤公爵が來られて演説をされましたが、その演説に依つて從來東京専門學校が謀反人の養成所であるかの如く誤解されて居た。その冤を雪がれたといふやうな譯で、なかなか盛んな式典であつたのであります。その第二日に學術講演會がありまして、その中に先程お話の有賀さんの講演があり

ました。有賀さんは、演説は餘りお上手ではなかつたやうでありましたが、其時は書いた物を朗讀されまして、自己を紹介し自分は外國に行くことが何回、外國語を知つて居ることがどの位、有賀の名は日本に於けるよりも外國に於ける方が高いといふやうなことを言はれて色々評判になつたのでありました……。私がこの學校に参りました時が丁度學校も制度變改の境目になつて居まして、東京專門學校から早稻田大學になるといふ譯、又早稻田の地勢もその時に面目を一新しました。その年の春の頃、茗荷畑と田圃の中に二條の繩を張つて道路を計畫して居ましたが、あんな所に道路を造つてどうなるだらうと思つて居ますと、それが九月の末に出來上りまして、學校の創立二十年式典と同時に開通式を挙げ、その新道を通つて日本で初めてと言はれる提灯行列を致しました。當時沿道には僅に十二三軒しか家がなかつた。勿論ところどころにあるので、畑や田圃を隔てゝ遙かに目白臺を望むといふやうな光景でありましたが、その時分、この會館の向ふあたりに二階建の、今で言ふとバラック式の細長い薄つぺらな下宿屋が出來ましたが、それが九月初旬、二百十日前後の大嵐でその下宿屋が壊れて學生が一人怪我をしたといふやうなこともありました。まあそんな風で新道が出來ましたが、これは私設の道路で修繕が行届かず雨が續くと泥濘脛を洩し、學生なども通學に大分困つて居ました……。話が飛びますが、私が法科に付て奇異に感じたことを申上げてみたいと思ひます。それは教授會のことです。が、御承知の通り教授會は明治四十年の四月に設定され、四十幾人の教授會議員によりて組織せられたのであります。その頃は一年に一回位總會を開いて居ましたが、校内では開くべき所がありませんので、多くは學校以外の場所で開き、その後で晚餐を饗するといふことになつて居ました。その後四十四年に教授會の規則に改正が加へられて、教授の任期を三年毎に更新することになり更に數年後現制度に改まつたので、その

時に教授會議員は之を教授と稱すといふことになつて、初めて教授といふ名稱が早稻田大學に起つたのであります。それから各學科でも教授部會を開き得ることになり政治經濟學科や文學科、商科などはそれぞれ學校内で開いて居ましたが、法學部の教授會は他の先生もおいでになるので、それを校内で開くとお集まりになるのに御不便であらうといふやうなことから外に持つて行つて開いた。酒井伯爵家の集會所になつて居ました矢來俱樂部とか或は校友會の俱樂部であつた、丸の内の内幸町の元菊五郎の別宅とか、それから前の日清生命保險會社の樓上に出來た永樂俱樂部へも参りました、當時は中村先生が法科の科長でおありの時でしたが、法科と申すのは大學部法學科と専門部の法律科のことで、それを一緒にして一つの教授會が開かれることになつて居ました。それで教授會が開かれる以前には私どもは法科の先生は理窟屋の集まりだから喧ましいことばかり話すであらうと思つた。所が出て見ますと、法律をすつかり消化されて居るから理窟抜きであつたものか、議事はほとんど一瀉千里で至極簡単に終りまして、面白い話を餘談として承るやうなことでありました。當時私は各部の教授會に出て居ましたので、他の教授會の情勢は分つて居ましたが、なかなか難かしい所もあつてさう簡単には行かなかつたのであります、法科だけは豫想に反した感じがいたしました。それから先刻訴訟演習のお話がありましたが、それに付て考へ起しますと、それは牧野先生がお始め下さつたのでありませうが、私の記憶して居ますのは今村さんが刑事法實習の教授で、遊佐さんなどが學生の時代に大講堂で訴訟演習をやつたときのことであります、問題は刑事事件であつたが、その時に廷丁を拵へなければならぬが學生には廷丁になる人がない、誰かあるまいかといふので物色しますと、その當時教員室の給仕に工藤といふ者が居まして……、十六七歳でしたが、お前なれといふのでそれを廷丁にしました、これは餘談ですが、その工藤と

いふ男は感心な青年で、學校に居る中に青山の師範學校の入學試験を受けて合格し、卒業後暫く教員をして居ました、これには一つの美談があるのでありますが、弟が一人居つて、その弟が今で申しますと大塚辻町あたりに三叉路がありましたが、その角の鍛冶屋に職工となつて働き兄に貢いで居ました。その兄は奮發して廣島高等師範學校の入學試験にパスして入つた。その間の學費もその弟が貢いだといふことで、卒業後京都の高等女學校の教員に任命されたが、のち京都帝大の理學部に入り、之を卒業して、理學士となり今ではある縣で高等官の教諭をして居ます。で當時の辯護士裁判官の諸君もそれぞれ出世しましたが、その廷丁も亦頗る出世したのであります。それから訴訟演習も一時中絶しましたが、中絶する直前は大正四年頃と思はれます、その時代にはよほど上つ調子になつて居ました。是は政治科の擬國會に對抗するといふ意味もあつて盛大にやるやうな風にながれ、當時世間を騒がしたシーメンス事件を織込んで刑事事件をやりました。それで證人として、待合の女將が出廷するといふので學生がお白粉をつけ丸髷に結つて出た。でさういふ形式ばかりに捉はれるやうぢや訴訟演習も意義を失ふといふので廢めたやうに思ひます。それから後再興して現在のやうな體裁の訴訟演習になつたのであります。

○牧野氏 さういふことがありましたね。

○中村(芳)氏 もう一つ、是は私が秘かに心配したことをお話いたします。それは矢張り中村先生の科長時代でありましたが、法學科が英法科と獨法科とに分れた後で、獨法科が危機に瀕したといふ問題であります。何でもその時分——、卒業生が三四人しか出ない、學生が皆で二十二三人といふやうなことになりました。丁度その時の學長は天野さんでありましたから大正五年頃と思ひます。天野さんは大正四年八月就任されて六年まで居られたのであります。その時獨法科の存廢問題が起りま

して、まあ御前會議といふやうな有様で、天野さんの前で中村先生、當時の理事田中さん前田さんなど集りまして、どういふ風にしようかといふことになりましたが、結局獨法科は今でこそ英法科と分立して居るが、明治三十五年に大學組織になつて以來法學科といふものは事實上獨法科みたやうなもので古い歴史を持つて居るし、何とか入學の規則でも改正したらもつと盛んになるだらうから、兎に角經濟問題だけは辛棒して矢張り繼續してやることにしようといふことになりまして、私共も安堵いたしました。今日では八百有餘人の學生を收容し、政治經濟學部と拮抗するやうな盛大な法學部となつて居ますが、それと當時のことゝを考へ合せますれば實に今昔の感に堪へない次第であります。

○寺尾氏 大正四五年は三人しか卒業生が出て居りません。

○中村(進)氏 訴訟演習の時、誰が放火したかといふ事件で、その時には炭俵まで持つて來てやつたが、その晩に私の宅に來た者がある、それで何の爲に來たかと言ふと、先程私を被告にして一時間もあそこに立たせたのは人權蹂躪だと言ふのです。あなたは何を言ふのです、あれは被告の眞似をしたのだ。いや私は家に歸つて面目が悪い。そんな馬鹿なことがあるものかと言つたが、あの時は女が放火した事件で、これは實際あつたことで、それをやつたのですが。

○牧野氏 私なども裁判所の記録を持つて來て、名前とか時を變へてやつたのでした。

○寺尾氏 大正九年頃ですか、お白粉問題がたゝつて、あんなことをやられては困るといふので許されなかつたが、今後は絶対にあゝいふことはしない、學問的態度でやるからといふので保證をしてやるやうになりました。

○中村(芳)氏 シーメンス事件が大變でしたね。

○中村(宗)氏 先程中村(芳)さんのお話に、獨法が少かつたといふことで

したが、私の出たのが六年でしたが、矢張りあの時も獨逸語の二年と三年と兩方合せて出席は一人か二人でした。

○寺尾氏 中村(宗)君の時は五人になつてゐます。

○中村(宗)氏 その中出るのは二人位でした。

○寺尾氏 大正八年が五人に減つて居ます。

○中村(進)氏 大變澤山になつたこともありますね。中川挺三といふ大變出来る人が居りましたね、あの人に教室でやつつけられたことがある。

○前田氏 これは學校の記録にもあることでせうが、法科に關することだけ一寸書いて來たので簡単に申上げて置きますが、明治十九年六月に初めてあの法律の講義録が、他のものも一緒ですが、出たのです。それからその年の十二月に私立法律學校特別監督といふ法令が東京府令か何かで出て、それで監督を受けたのであの當時は都下の法律學校を政府は非常に監督したものです。

○中村(芳)氏 それは受験資格に關係したものではないでせうか。

○前田氏 法律家連中が政治上に彼是口を出すといふので、明治十九年十二月私立法律學校特別監督といふ名義で政府が初めて私立各法律學校を監督した、當時は政治科其他は御構ひなかつた。それから今度は二十一年五月に特別監督制を改めて特別認可學校規則といふものが出來て、之で例の判檢事の資格を決めた。尙ほその年に早稻田は法律科と行政科の二學科を第一第二法律科と名を改めた。それが二十一年です。それからこの年に英學科といふものを設けて、政治、法律、行政及び英學科の四つになつた。そして同じ年の八月學校は特別認可學校になつた。十月には英語政治、英語法律、英語行政といふ學科を置いた。そして英語科といふものは豫科と普通科と二つにして、そして各々二學年、尙ほ講義録に初めて行政科を加へて居る。そして二十二年二月に憲法發布となつて法律の諸課目はその年に改正した。その年の五月前年地震で壞れた大

講堂が出来た。それから文學科は二十三年に設けられた。二十四年二月に、それまで出版部は麴町富士見町邊にあつて、横田敬太と云ふ埼玉の人がやつて居たがそれがいけなくなつて、高田先生が學校で引受けることにされた。十九年の創設で初めは單に政學講義録と稱し政治學のみの講義であつたが、二十一年に至り司法科行政科を加へ毎月三回發行した。二十六年十二月に指定法律學校といふものになつて卒業生が判檢事試験に應ずることが出来るやうになつた。それから二十七年に法律科の學生は徴兵猶豫の特典を受けるやうになり、二十八年に文官高等試験令が出て官私平等に其試験を受けるやうになつた。二十九年に各學科を改めて學部と呼ぶことになり、そして主任講師といふものをその時に定め、そして英語學部は四學年とした。それから二十九年十一月に法學部が主催となつて始めて都下の法律學校の聯合大討論會を開いた。さうすると千五百人ばかりも來會者があつて非常な盛會であつた。

○中村(進)氏 あの時僕は理事長になつたが、あれを整理するのに大騒ぎをしました。

○前田氏 それから三十一年に各私立法律學校の校長が判檢事試験に關して司法大臣に請願をした。これは學校の記録にもあると思ひますが、その課目など載つて居ると思ひます。それから三十一年の八月から法律科は新法典全部を講義するやうになつた。

○牧野氏 民法を施行されてから後ですね。

○前田氏 それから司法省令第十六號を以て判檢事資格に關して改正をした。これは各法律學校が喧ましく言つたものですから、それから三十二年に高等豫科を設けた。是は唯一年間の高等豫科で九月から翌年の七月までの學期です。それから三十三年に初めて留學生を出すことゝなりそれが九月に出發した。尙ほ地方巡回講演といふものゝ第一回もこの年にやつたものです。まあ以上が大體法科の初め頃のこと、是は勿論學

校の記録にもありますが一寸私の手控から書いて來た譯です。

○**牧野氏** 大學になつてから法科の方は口頭試験などもやりましたね、何でも民法、刑法といふやうに色々課目を變へてやつた、二課目位宛やつたやうで、講師が二人か三人必ず列席してやるので僕もやつたことがある。裁判所に出て居る者は日曜日を潰して朝から晩まで掛つて一人宛呼出して國家試験の口述試験みたやうなことをやつてゐた。

○**中村(宗)氏** 何時頃のことですか。

○**牧野氏** 大學になつてからです。丁度こんなことがあります、刑法の口頭試験をやつたことがある。誰が受持でしたか、その人が臨時に差支があつて、僕と飯島喬平君ともう一人の三人で、専門家でない人が刑法の試験をやつたが、丁度日曜日の朝から晩まで掛つて、こちらは何も知らぬのでこつちが受験生みたやうな譯で、まあやつと脂を搾つてやつたことがあります、苦しかつたですね。

○**渡邊氏** 先程關さんのお話に生徒が二三百人あつたらうといふことでしたが、私どもの記憶では七八十人だつたと思ひます。何故さう思ふかといふと、評議員會か何かで學事報告といふことを學長から言はれて、事務員が何人、講師何人といふやうにまあ八十人になつたといふことで、それぢや我々の時の學生の全體程だと思つたから、八十人位だと思つてゐます。

○**前田氏** 八十人位だつたでせう。

○**渡邊氏** それから今思ひ出したが卒業證書に私などの時は講師の名前を全體書いてありました。先生全體の名前が、全體と云つてもさう大して居りはしなかつたが。

○**上原氏** 法律科は法律科の先生だけでせう。

○**渡邊氏** 全部の人の名前です。

○**寺尾氏** 段々時間も経つやうですが大橋さんから何か。

- 上原氏 佐藤善長君の話が出たが、あれは中村君の前ですね。
- 中村(芳)氏 初めからやつて居りました。
- 上原氏 あの人は學生の名前を悉く覚えてゐた。何百人居つたか知らぬが一人残らず知つて居る。
- 前田氏 無筆と云つても好いので字は書けなかつた。海軍水兵上りでした。
- 牧野氏 僕の時分にはあの人一人でした。
- 上原氏 月謝を納めた人と納めぬ人とはよく覚えてゐた。そして名前と顔とを對照して間違はなかつた。
- 前田氏 家に歸つて酒を飲んで早く寝る、朝は早く學校に行く、お晝頃になると歸つて行くといふ風でした。
- 中村(芳)氏 月謝を納めない人はその教室に行つて退場を命ずる。
- 中村(進)氏 時間割はあの人が拵へてゐた。
- 大橋氏 私は丁度東京専門學校が大學になります境目の時に卒業したので即ち明治三十六年の卒業です、入學したのが三十三年、先刻中村さんからお話のあつた如くその時分は九月が學期始めて翌年の七月が學期終りといふことになつて居りました。私がまだ郷里に居た時に東京専門學校からパンフレットが來まして、夫れに此學校は大隈さんの學校だといふ様な事が書かれてあつた譯で、之を見た私は、是非東京専門學校に這入りたいといふ考を持ちまして上京して入學試験を受けたのですが、此時分在學中徴兵猶豫の特典を受ける爲めに乙種試験といふものがありました。私は其試験を受けて入學したのです。その入學試験の時の試験監督が此所に居るゝ前田さんであつて前田さんは教壇の所に立つてカンニングをしてはいかぬと大きな聲を出して怒鳴つて居られたことを記憶してゐます。當時の校長は故鳩山和夫先生、學監として高田前總長、そして此處に居られる牧野先生、中村進午先生などの教を受け

たのであります。民法では小山前司法次官、今の鈴木政友會總裁、平沼樞府副議長も先生でありました。牧野先生には相續法を教はつたのであります。中村先生には國際公法を教はつたのですが、法の語源を最初に聞かされて、法は獺から轉訛して來たので、獺といふ字は麤と書くので大昔は惡事をするに獺に食はせたから法が生じたのだと、文字まで書いて説き聽かされたことを記憶して居ります。商法は今の和仁大審院長、原樞密顧問官、刑法は岡田博士、憲法は副島先生、山田三良先生には國際私法、經濟は天野先生といふ様に、立派な先生方の教を受けたのであります。さういふ風であつて我々は誠に幸福でありました。併し學生の數は少くて、法學部の中に法律科と行政科とがありましたが、法律科の方は最初五十人位であつたと思ひます。私は行政科の方でしたが此方は最初七十人位でありました。固より判檢事試験、辯護士試験を受けたい希望であるから、参考に前の卒業生の其方の成績なんかを校友名簿を繰つて見て居りましたが、判檢事になつたり辯護士になつた人が少ないのを見て膽を冷しながら勉強してゐたやうな譯でありました。御蔭で三十六年に卒業した者は比較的多く試験に及第しました。法律科の方は四十一人の卒業ですが九名、平松、池田、鈴木、木谷、川井、小林、柿本、岸田、宮川、の九人が及第しました。行政科の方は卒業生は六十人で人は多かつたが及第者は少くて、新保、宮野、福島、岡本、長谷川、それに私とで六人です。私のクラスには先程お話の唐寶鏐、といふ支那人が居つて是は今支那で辯護士をしてゐますが、右の内法律科の方では池田、木谷の兩辯護士が故人になりました。行政科の方では新保大審院判事、長谷川辯護士が故人になりました。斯ういふ人々が早く物故されたのは誠に惜いことであります。さういふ風に我々の時は數も少く、殊にあの時代の行政科と法律科との課目は殆ど變りなく、行政科の方は財政が多いだけであつたのですから科名丈は異つても實質は法學部が一科の様

なものです。それから法學部と政治科とが憲法、國際法、經濟、財政等の同じ課目は一緒に大講堂で教授を受けました。さういふ譯で政治科の方の人々とも懇意になり、英語政治科を出た林ブラジル大使、宮内省の伊夫仗君、青柳教授、土井代議士などとも學生の時分から懇意でした。それから入學した當時は、先程からお話がありますが、鶴巻町通りの道は殆ど車の行違ひが出来ない位の田圃道であつてその邊は皆水田であつた。學校の前に文房具屋と下宿屋があつた。その二軒位丈で、それが今の出版部の所にあつたやうに思ひます。その背後はずつと水田で、大隈さんの邸の周圍も水田で、學校の校舎は震災で潰れた煉瓦の大講堂といふのと、兩脇に木造の建物があつた丈で背後は丘であつて、今の三つの講堂なども丘を崩してそこに建てたものであります。故大隈老侯高田先生の銅像の建つてゐる所、恩賜館の所は皆高い丘であつて、上は茶畑であつた。私が在學した當時の地形の模様はまださういふ風で、大隈さんの古い門のあつた前あたりは茗荷畑でありました。今から顧みるとよくもこんなに發展したものだと思ひます。併し將來も是迄の様に發展して行くことを祈るものであります。運動會をやる時には穴八幡の前の廣場即ち今の第一高等學院のある處でやりました。それも徒歩競走、障礙物競走、高飛、幅飛位でありました。それから討論會は各先生方の指導を受けてやりましたが、訴訟演習は私の記憶する所では一回しかやつて居りませぬ。鳩山校長が裁判長になられて、席陪判事とか書記とか辯護士は皆我々學生がやつたのであります。そして、それをやつた者は不思議にも殆ど皆國家試験に及第して居ります。其他には特に申上げる程のこともないのでありますが、常に感謝いたして居りますことは、その時分私共は諸先生から御深切なる御教授を受け又親しく御指導を蒙つたことであります。牧野先生の若宮町の御私宅にも度々伺ひ、その他鈴木先生、平沼先生の御私宅にも伺ひました。殊に私は辯護士をやつて居る

のでありまして、現在は餘り親族相續の訴訟事件は一般に少くないやうであります。私は相續事件をうまく處理することが出来まして、判例も作り又私が是迄に最も多くの収入を得たのは相續事件でありました。是は牧野先生より教を受けた方の學科に依つて得たので深く感謝して居る次第であります。

○中村(進)氏 先つきのカンニングの話ですが、私もカンニングをした人を調べて、なかなか自白しなくて困つたことがあります。あとでその生徒が、先生さつきは酷い目に遭はせましたねと言ふから、仕方ないぢやないかと言ふと、でもあゝいふ時にはなかなか正直には申せませんと言つてゐたこともあります。

○牧野氏 懸賞討論會などもありましたね。各學校から選手が來て、あとで一等二等を決めるといふやうなことをやりましたね。

○寺尾氏 大變長い時間に亘つて面白い又有益なお話を伺はせていただきましたことを感謝いたします。これを後の人に傳へて、五十周年のいい記念にしたいと思ひます。どうも有難うございました。